



2024.05.22

オンライン講座

精神医学（各論）_5_神経発達症群_5



もりさわメンタルクリニック

診断の難しさ

境界の曖昧さ

発達歴が鍵を握る。成人になってからの診断はさらに困難。時間が経っていることに加えて、症状が微妙だからこそ今まで診断がついていない。

診断の概念そのものが境界になじまない。でも、境界は必要であるという矛盾。

「境界線は引けるのか？」

→塩水や山の例：自然界のある特徴の有無を問題にすると境界線を引けないことが多い

診断の機能

「真実」の追求は不毛な結果となることが多い

実際上は2次障害の診断名が使われていることが多い。実際その方が有用であることもある。

診断自体は当てはまらなくても理解としては幅広く考える必要性がある（傾向や特性といわれるものの日常生活への影響を軽減）。

伝達の条件

- ①やりようがあるという実感
- ②長所でもあるという実感
- ③言語理解
- ④自他の相違への気づき

職場や家庭での生活が困難となった場面で、本人に我慢させたり言い聞かせたりするための方法として行うのは不適切。特に上記の①、②に注意して行う必要がある。そうでないと、自身の特性を欠陥として捉えてしまったり、自己の存在すら否定的に感じてしまう場合もある。